

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02518

研究課題名（和文）学生の汎用的能力を養成する研修プログラムの構成要素に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Components of Training Programs to Develop Student's Generic Skills

研究代表者

村田 晋也（MURATA, Shinya）

愛媛大学・教育・学生支援機構・講師

研究者番号：10580475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、大学生のリーダーシップ養成を目的とした研修プログラムの構成要素について、それらの受講経験を持ち、現在は既に大学を卒業して実社会で活動する卒業生らを対象とした追跡調査を行った。当該プログラムを通して得た経験や学びを実生活の中で活用する機会があるか、また体得したスキルやマインドが現在でも有用であると捉えられているのか等を問うた結果、立場や価値観の異なる他者との関わりの中で自分や組織の目的・課題を考え、協力して活動することを経験し、それを振り返るといふ一連の過程が有用なものと捉えられているとの示唆を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学生が在学中に体得するよう期待される汎用的能力は、単に座学を通して知識として蓄積するのみならず、経験と内省により体得することが重要である。本研究は、なかでもリーダーシップに関するスキルやマインドに焦点を当て、大学生が在学中にそれを養成・伸長させる上で有用な研修プログラムの構成要素について、実社会で活動する卒業生らを対象とした調査から明示しようと試みたものである。調査から得られた知見をもとに、現行のプログラムの改善及び新規プログラムの構築に有用な示唆を整理することで実社会からの要請に応えることこそ本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study examined the components of a training program designed to develop leadership skills among university students. The survey was conducted among graduates who had attended the program and were now working after graduating from the university. The survey asked whether they have had opportunities to apply the experiences and learning from these programs in their real lives, and whether they still consider the skills and mindsets they acquired to be useful today. The results indicated that the participants found the series of experiences of thinking about their own and their organization's goals and issues, working together, and reflecting on their experiences useful in their interactions with others who had different perspectives and values.

研究分野：大学生のリーダーシップ養成

キーワード：大学生の汎用的能力 リーダーシップ養成 研修プログラムの改善・開発

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 学生の汎用的能力の養成に関する実社会からの要請: 大学生が在学中に体得することが期待される汎用的能力の背景には、これまで様々な省庁やシンクタンク等により提唱されてきた能力軸がある。例えば、「人間力 (内閣府)」「就職基礎能力 (経済産業省)」「社会人基礎力 (経済産業省)」「学士力 (中教審)」などはその主要な例である。その中には、リーダーシップそのものや、それに関連する力 (コミュニケーション力、チームワーク、協調性、ストレスコントロール等) が内包されているが、これらの汎用的能力は単に教室での座学によって学び、知識として蓄積されればよいという類のものでないことは有識者の多くが指摘するところである。例えば、その一例として金井 (2005) は、リーダーシップのような実践的なトピックについては鑑賞するように学んではならず、経験と観察こそが「リーダーシップの学校」であり、自分の発想や行動を内省して振り返り、内省して見出したことを実践に生かすよう勧めている (金井壽宏 (2005)『リーダーシップ入門』日本経済新聞出版社、pp.35-56.)。

(2) 研究代表者・分担者らが携わるリーダーシップ養成の取り組みと、その受講学生らを対象としたこれまでの調査結果: 本研究の代表者及び分担者らはこれまで大学間連携事業として学生の汎用的能力 (主にリーダーシップとそれに関連したスキルやマインド) の養成を狙いとした学生研修プログラムを企画・運営してきた (平成 24 年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム」、以下 UNGL と略記。補助期間が終了した平成 29 年度以降は、連携校間の自主的な取り組みとして事業を継続しており、本研究の申請時、西日本の 21 大学が連携に加盟)。当該事業においては“学んだことを実践し、それを振り返り、教訓を引き出して、改善を図る”リフレクションを重視した学習サイクルを用いてプログラムを構成している。それが学びを生起し、リーダーシップに関するスキルやマインドの成長を促すことについては学生自身が実感していること、またそれを観察する教職員も体感していることを研究代表者・分担者らは 2017 年から取り組んできた研究 (文部科学省科学研究費補助金課題番号 17K04559「リフレクションを用いた大学生のリーダーシップ養成に関する効果検証及び教材の開発」) により整理してきた。他方、それら学生たちが得た能力やスキルが実社会においてどのように活用されているのか、また、当該プログラムを通して体得した汎用的能力のうち有用なものとして機能しているのは何であるのかについてはまだ十分に明らかになっていない。そこで、本研究ではこの点を対象とした調査を行い、そこから得られたデータ等を用いて、現行プログラムの改善や、新規プログラムの構築に関する示唆を得たいと考えた。

(3) 研修プログラムを構成する要素と学生の能力開発の係りに関する実証的研究のニーズ: 学生期に汎用的能力やリーダーシップ等の養成に取り組むことが実社会から期待されるようになるにつれ、様々な教育機関が多様な研修プログラムを企画しているが、中でもリーダーシップに関連した能力や態度に関して OB/OG を対象とした調査を行い、プログラムにフィードバックする形で示唆を得ることを目的とした継続的な研究は我が国では未だ十分とは言えない。この点で、これまで延べ 1,000 名以上の学生がプログラムを受講してきた大学間連携事業を背景として実施する本研究は、新規性と独自性・創造性を持つものであると考えられ、(ア) 現行の大学間連携で取り組む研修構成のあり方について実社会の視点から検討し、プログラムの改善・精緻化に活かすことができること、(イ) 申請者らが携わる事業に止まらず、今後学生の能力開発を目的とした研修等を新規構築する他の教育機関等に知見を提供することで、汎用的能力の養成に対するプログラム構築へのニーズの高まりに応えることができること、そして、(ウ) 実社会で活躍する OB/OG への調査結果から、自分たちが取り組む研修プログラムの意義や有用性を知った現役学生の学びへのモチベーションが向上することといった効果を期待できる。

## 2. 研究の目的

汎用的能力 (主にリーダーシップとそれに関連するスキルやマインド) の養成を狙いとした研修プログラムを企画・運営するにあたり、どのような構成要素を組み入れることが研修の効果性向上に資するのを探り、今後同様のプログラムを実施する際に有用な知見やノウハウを蓄積・共有する。

## 3. 研究の方法

(a) UNGL が実施するプログラムの受講から得た経験や学びを実社会でどのように活用しているか、特に有用だと感じるスキルやマインドについて、またそれを体得する契機となった研修プログラムとその内容について卒業生を対象とした追跡調査を行う。

(b) 前述(a)の調査及び該当する領域の先行研究等をもとに、実社会で有用なスキルやマインドの要請に影響しているプログラムの構成要素について、現行プログラムの受講学生への調査を継続しつつ整理する。

(c) 実社会へのエントリーを控えた学生を対象とした現行の研修プログラムの改善ならびに新規プログラムの構築に資する示唆について取り纏め、公表する。

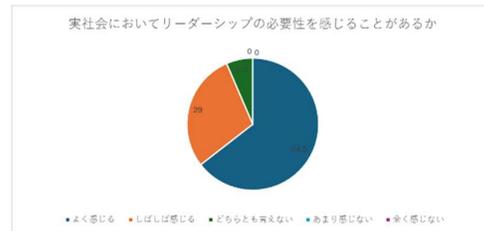
#### 4. 研究成果

※本研究は新型コロナウイルス感染症の影響から当初計画に調整を加えて実施することとなった。研究年度の前半（2020～2021年度）には本研究が対象としている複数の研修プログラムを中止したり、オンライン開催に切り替えて行う等を余儀なくされたりしたこともあり、研究チーム内で協議の上、調査・研究活動や時期に調整を加えつつ完了を目指すこととした。それに伴い、補助事業期間の延長を申請し承認を受け、2023年度を研究最終年度としている（参照：学振助一第636号「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の補助事業期間の延長の特例について（通知）」、令和4年9月7日）。

① **現役学生を対象としたプレ調査と、本調査へ向けた設問項目の洗い出し**：本研究が主眼とする卒業生を対象とした調査を行い、そこから大学生向けに企画・提供する研修プログラムに有用な構成要素を見出す試みに先立ち、2つの現行のプログラム（UNGL学生リーダーズ・サマースクール及びUNGLリーダーシップ・チャレンジinサイパン）の受講生を対象としたアンケート調査の実施に加えて、これまで8年以上にわたって研究チームが蓄積してきた同種データの整理、及びプログラム受講経験のある学生に対するヒアリングとその結果の分析を通して、本調査に向けた設問項目の検討と選別を行った後、次項の調査に臨んだ。

② **卒業生を対象にした追跡調査**：在学中にUNGLプログラムを受講し、現在は大学を卒業して実社会で活動しているOB/OGのうち2012年3月から2023年3月までに大学を卒業した8大学62名を対象に追跡調査を実施した。その結果の抜粋は以下の通りである。

① **既卒者が実社会で感じる「リーダーシップ」の必要性**：民間企業はもちろん、公務員や教員、家業などに従事する卒業生らが実社会・実生活の中で「リーダーシップ」の必要性を感じることがあるかについて、「よく感じる」から「全く感じない」まで、「どちらとも言えない」を含む5件法で尋ねたところ、「よく感じる（64.5%）」「しばしば感じる（29.0%）」と、回答者の9割超が実社会においてそれが必要であると感じていることを確認できた。「感じる」旨を回答した者にはその具体的なシーンに関して尋ねたが、大半が会議やプロジェクト・企画等の進行、部下や後輩の指導や育成、対人関係や他者との協働や連携といったビジネスに関わる場面を挙げた一方で、地域社会や家庭においてそれが必要であるとするコメントも複数確認された。



② **研修プログラムの受講がリーダーシップの養成や伸長に及ぼした影響**：ほぼ全ての回答者がUNGLの提供するプログラムへの参加経験が自らのリーダーシップに関する見方や考え方に影響したと捉えていた（「大きく影響した（71.0%）」「影響した（27.4%）」；「どちらとも言えない」を含む5件法で確認）。また、9割超がそれらを通して学んだり身に付いたりした力（知識・スキル・マインド等）が、現在、実社会で活動する上で役に立っていると感じていることが明らかになった（「役に立っている（64.5%）」「ある程度役に立っている（29.0%）」；「どちらでもない」を含む5件法で確認）。

③ **UNGLプログラムの受講を通して体得したスキルやマインドと現在の社会生活との関連**：プログラム受講から得た経験や学びについて、「リーダーシップ・マインド（7項目）」「リーダーシップ・コンピテンシー（14項目）」に整理して尋ねた。これらはいずれもUNGL及び本研究チームが参加学生のセルフチェック及びプログラムの効果性に関する調査・検討のために用いる指標であり、関連するスキルやマインドの変化や成長を自他が確認することを狙いとしている（各項目については右表を参照）。リーダーシップ・マインドについて、プログラム受講を通して身に付いたと感じる項目は、上位から順に「他者受容（83.9%）」「自己成長（80.6%）」「主体性（79.0%）」、社会生活を送る中で役に立っていると思う項目については、上位から順に「他者受容（75.8%）」「主体性（66.1%）」「自己成長（64.5%）」との回答となった。一部順位の入替は確認されるものの、僅差で同じ3つの項目に回答が集中した（図1参照）。他方、リーダーシップ・コンピテンシーについては、プログラム受講を通して身に付いたと感じる項目として「対話促進力（74.2%）」「課題発見力（67.7%）」「順応性（56.5%）」の3つが上位を占めた。また、社会生活を送る中で役に立っていると思う項目についても「対

リーダーシップ・マインド	
自己受容	自己の理解を深め、価値ある存在として認識しようとする態度
自己成長	自分の行動を客観的に振り返り、反省に基づいて行動を改善していくこととする態度
他者受容	相手の立場や価値観を受け入れ、周囲の人と積極的に交流を広げていくこととする態度
他者成長	相手の言動を客観的に捉え、摩擦や抵抗をおそれずに伝えるべきことを伝えていくこととする態度
役割認識	目標の達成に向けて、あらかじめリスクを想定し、自らの役割を明確にした上で計画的に課題にあたらうとする態度
主体性	あれこれと自分なりに工夫しながら、周囲と協力して前向きに課題に取り組んでいくこととする態度
育成	他者を育成する観点から、指導したりサポートしたり、動機付けていくこととする態度
リーダーシップ・コンピテンシー	
プレゼン力	ポイントを整理して効果的に自分の考えを伝え、相手を説得する力
企画力	既存のルールに縛られない自由な発想で新しいアイデアを生み出す力
課題発見力	現状について自分の考えや、組織の目的や理念など多様な視点で分析し、問題点を明らかにする力
決断力	長期的な視点でゴールをイメージし、本質的な問題の解決に向けて課題に取り組んでいくこととする力
クリティカル・マインド	客観的な情報に基づいて、論理的に物事を分析する力
統率力	良好な人間関係に配慮しながら、組織を目標達成に導く力
業務分担力	目標達成のためのタスクを、メンバーの能力や事情などに配慮して振り分ける力
対話促進力	自ら自己開示することで他者の自己開示を促し、信頼関係を構築する力
規律性	社会のルールを遵守し、自らの発言や行動を状況に合わせて選択し、それをメンバーに浸透させる力
自己認識	自己の価値観を多様な視点で振り返り、それに基づいた行動を取る力
順応性	他者の状況を尊重し、多様な価値観を受容しながら、周囲に受け入れられる力
ストレス管理力	ストレスの原因を理解し、他者に配慮しながら、自らのストレスを予防する力
自己啓発力	成長のための機会を利用して、積極的に自らの能力を開発していく力
市民性/社会性	社会の構成員としての意識を持ち、社会の相互依存性を理解し、互いの利益を目指す力

対話促進力（74.2%）」「課題発見力（67.7%）」「順応性（56.5%）」の3つが上位を占めた。また、社会生活を送る中で役に立っていると思う項目についても「対

話促進力 (69.4%)」「順応性 (56.5%)」「課題発見力 (53.2%)」の3つに回答が集まった (図2参照)。データからは、大学在学中に受講した研修プログラムにて得た学びや経験及びそれを通じて身に付いたと主観的に感じる項目と、現在、職場や地域社会・家庭などで社会生活を送る中において役に立っていると思う項目が類似すること、また、プログラム受講を通して身に付いたと感じる項目が現在でも役に立っていると思う割合が高いことも確認できた。

#### ④ プログラムの特色ある構成について：

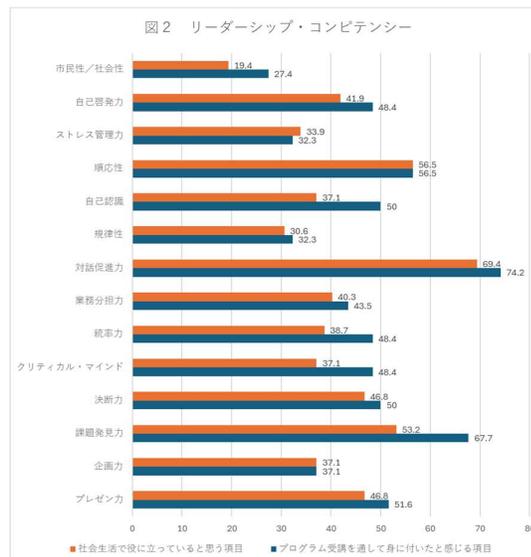
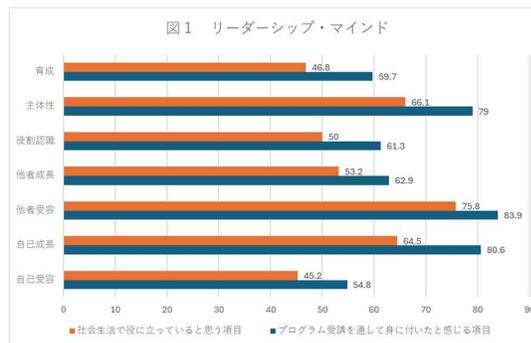
UNGLの主催する各プログラムは、大学間連携事業であることやそれが開始される以前の取組に係る背景から、所属大学の異なる学生と共に活動し、各々の挑戦を一緒に振り返ったり、自分の所属大学内外の教職員からフィードバックを得たりする等の特色を持つ。これらについて、受講後すぐの学生たちが肯定的に捉えていることはこれまでも明らかであったが、本調査ではプログラム受講後に一定期間が経過し、かつ実社会で種々の経験を得た卒業生らがどのように感じているかについて、改めて問うこととした。その結果、いずれの点についても回答者の殆どがそれを現在でも肯定的に捉えていることを確認できた。具体的には、自己のリーダーシップを養成する上でリフレクションが効果的であったと回答者の98.3%が認めており(「とても役に立った(67.7%)」「役に立った(30.6%)」)；「どちらとも言えない」を含む5件法で確認)、また、コメントやフィードバック等による教職員の関わりについては、全回答者が自己のリーダーシップ養成に役立ったと回答した(「とても役に立った(77.4%)」「役に立った(22.6%)」)；「どちらとも言えない」を含む5件法で確認)。さらに、自分とは所属大学の異なる学生と共に学ぶことが有益だったと思うかとの問いについてもほぼ全ての回答者が肯定的に回答した(「強くそう思う(85.5%)」「そう思う(12.9%)」)；「どちらとも言えない」を含む5件法で確認)。

上記までの調査結果から、大学生が在学中に期待される汎用的能力、なかでもリーダーシップに関連するスキルやマインドを養成するにあたって、立場や価値観の異なる他者との関わりの中で自分や組織の目的・課題を考え、協力して活動することを経験し、それを自らまた共に活動した相手や観察者とともに振り返るという一連の過程が、実社会で活動する卒業生らに今でも有用なものとして捉えられているとの示唆を得ることができた。

**③ 本研究から得られたデータや知見の公表と共有：**次の通り学協会における報告等を通じて公表を図るとともに、大学間連携事業 (UNGL) として実施する研修プログラムの企画・運営に際して活用できるよう関係する教職員間でシェアしている。

- 「大学生を対象としたリーダーシップ・プログラムの構成要素について」第30回大学教育研究フォーラム、2024年3月。
- 「パンデミック下における大学間連携リーダーシップ・プログラムの企画と運営：「学生リーダーズ・サマースクール」に関する事例報告」『大学教育実践ジャーナル』第22号、103-110頁、2023年3月。
- 「コロナ禍における国際交流型オンライン・プログラムの開発と実施、及びその成果：UNGL「リーダーシップ・チャレンジ in サイパン」に関する事例報告」『大学教育実践ジャーナル』第21号、91-98頁、2022年3月。
- 「コロナ禍における国際交流型リーダーシップ・プログラムのオンライン実施とその成果」大学教育学会第43回大会、2021年6月。

**④ 調査・研究の継続と今後の方向性：**本研究から得られた成果ならびに調査の過程で得られた示唆をもとに、2023年度より取り組んでいる研究プロジェクト (JSPS 科研費 基盤研究 (c)JP23K02137 人的ネットワークが大学生のリーダーシップ開発に及ぼす影響に関する研究) では、アイスブレイクやチーム・ビルディングを経てグループが機能するに至る一連のプロセスや、それらを振り返る際にできるピアでの、また教職員らとの関わり等からなる“新たな人的ネットワークの形成”が大学生のリーダーシップ開発に及ぼす影響に関して調査している。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 村田晋也、松村博行、仲道雅輝、岸岡洋介、山内一祥、浅田隼平、野間川内一樹、秦敬治	4. 巻 第22号
2. 論文標題 パンデミック下における大学間連携リーダーシップ・プログラムの企画と運営：「学生リーダーズ・サマースクール」に関する事例報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村田晋也、山内一祥、仲道雅輝、岸岡洋介、Reo Arriola、浅田隼平、野間川内一樹、秦敬治	4. 巻 第21号
2. 論文標題 コロナ禍における国際交流型オンライン・プログラムの開発と実施、およびその成果：UNGL「リーダーシップ・チャレンジinサイパン」に関する事例報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村田晋也、仲道雅輝、岸岡洋介、山内一祥、Reo Arriola、浅田隼平、秦敬治
2. 発表標題 コロナ禍における国際交流型リーダーシップ・プログラムのオンライン実施とその成果
3. 学会等名 大学教育学会 第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村田晋也、山内一祥、岸岡洋介、仲道雅輝、浅田隼平、野間川内一樹、秦敬治
2. 発表標題 大学生を対象としたリーダーシップ・プログラムの構成要素について
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山内 一祥 (YAMAUCHI Kazuyoshi) (90626516)	佐賀大学・キャリアセンター・准教授  (17201)	
研究分担者	岸岡 洋介 (KISHIOKA Yosuke) (00773235)	京都外国語大学・共通教育機構・准教授  (34302)	
研究分担者	仲道 雅輝 (NAKAMICHI Masaki) (90625279)	愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授  (16301)	
研究分担者	秦 敬治 (HATA Keiji) (50444732)	岡山理科大学・教育推進機構・教授  (35302)	
研究分担者	淺田 隼平 (ASADA Shumpei) (50925089)	佐賀大学・全学教育機構・講師  (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------